

どうぎょうだ よりあいた` 同行田(寄合い田)

●記録によると“同行田”とは昭和 5 年頃より昭和 22 年頃まで各地区の組(当時は“講”と呼ばれていた組織)として独自に管理し共同で耕作していた田んぼが何反か存在していました。



“同行田”と呼ばれていた田は主に現在の北川(屋去水門付近)の近辺やその他地区に散在し、耕作されていたようです。

そのような田んぼを“同行田”と呼び、又地区によっては“寄り合い田”とも呼んでいました。各組等で耕作していたこのような田んぼの面積は余り広くはなかったようです。

●どうしてこの時期、このような組として共同で耕作する田んぼ`が存在していたのか

- ①戦争時期の関係で農作業の働き手が不足していた(特に男手)
- ②農作業は主に人手(牛)に頼っていた(機械化が大変遅れていた)
- ③組としての収入源の確保等

●一例として、昭和 16 年(戦争が始まった年)のある地区の“同行田”の米収穫状況(正確な耕作面積は不明)は……

- ①4 俵 1 斗5升、一俵当たりの価格 17 円 90 銭 計 78 円 20 銭と記録にあります
- ②ここで肥料代、臼すり代、同行(組)の人達の食事等の経費を計算すると純益は 32 円 54 銭とあります
- ③これを同行(組)の貯金として管理していたようである

現在でもこの額を引き継いで管理している地区もあるようです

※特にこの時期は人手が不足していたので働ける子供達までもがもこのような“同行田”に手伝いとして駆り出されたとの話もあります。

※昭和時代の一番苦しかったと思われるこの時期に皆の知恵がこんな所にも生かされていたのではないかと思います。

●戦後徐々に“同行田”が廃止されていった主な理由として…

①耕運機が昭和28年、29年頃よりこの地に初めて導入され初め、機械化が大幅に進み又農業従事者も増えた。

②肥料等の改良、進歩

③収穫量増加、米価改善

④地区(組)の組織体制の確立

等により“同行田”と呼ばれる田は徐々になくなり各個人(名義)で耕作されるようになりました。尚今でも別名“寄合い田跡”と呼んでいる田もあるようです。

※地区の記録帳や年配の方々の話を参考にしています

2017/2 H,A